

修報（論語素読会会報）

## 巻 頭 言

### グローバル社会の草莽掘起

学校法人昌平黌 理事長

田 久 昌 次 郎

この度、論語素読会会報「修報」第十五号が刊行されることに心よりお喜びを申し上げますとともに、素読会関係者のご尽力に敬意を表します。

いま、文春文庫から復刻された大佛次郎（おさらぎ・じろう、1897－1973）の「天皇の世紀」を手にし、読み耽っています。とは言っても、12巻に及ぶ大分な歴史書であり、引用が多く文体も現代物に比べると古く読みにくいので、最後まで読了できるかは甚だ自信はありません。ほぼ同時期に発表された司馬遼太郎の「坂の上の雲」とは、随分と異なる作風であり、坂の上の雲は大衆受けする「歴史小説」とすれば、天皇の世紀は大佛史観ともいえる「史書」の趣きがあります。

読み解くことに難儀ではあるのですが、その時代や世界の動きを俯瞰する確かな視点に驚愕するとともに、維新から140年以上経っても日本人の外圧に対する対処方法は変わらないと考え込んでしまいます。

明治維新は、吉田松陰の「草莽<sup>そうもうくつき</sup>掘起」に代表される下の者が行った革命であり、尊皇攘夷論から尊皇開国論に変化し、外国列強と争うことなく、「和魂洋才」西洋文明を上手に取り入れた歴史と賞賛され、諸外国からも「維新に学べ」とよく言われます。そして、その素地は江戸時代にあり、庶民に至るまで儒学・漢文の素養があったからとも、日本人の器用さ・物まね上手に起因しているとも説明されています。そのような素地・素養があったことは認めるとして、大国清が中華思想を脱しえず、産業革命以後の英国を初めとする欧米列強に飲み込まれる様を間近で見つめながらも、祖法である鎖国を頑なに守り、攘夷と称し、詭弁を弄してまで外国文化を拒絶した公家や幕閣の頑迷固陋さは、戦後60年を経て財政破綻を前にしながらも、経済発展を金科玉条のように唱える今の政府にも当てはまるのではないのでしょうか。

幕末支配階級の頑迷固陋さがどの様に移り変わるのか、あるいは、変わらずに時代から取り残されていくのか、大佛史観の今後の展開に大変興味を持っています。人間の生き方・道を追求する余り（現代はその逆かと思われますが）、形式主義・旧弊にこだわり、柔軟な発想を排斥する愚をいつ、どの時点で先人は方向転換できたのか。一人の人間の思考方法は、そう大きく変えられるものではない筈で、時代のうねりの中で、トリガーとなったのは何かを、グローバル社会で生きる日本人として考えておくべきように思います。

最近、一部の学生からですが、孔子祭や孔子の教えを学ぶ必要性を問う声が聞かれます。

確かに、孔子の言う人生の処世術を身につけても、物を生み出す理論や技術と比べ実益は少ないでしょう。その一方で、海外の人々からは、日本人は地理・歴史・宗教などを含めて自分の国の文化を知らなさすぎると言われます。勿論、孔子の教えは中国の思想ですが、日本の文化・歴史に深く関わっています。自分の家のルーツや地域の文化を知るように、孔子の教えを知ることは日本の存立を理解することに繋がります。

この「修報」が、歴史や文化を振り返り、学生諸君の自己覚知の場となることを期待し巻頭言と致します。